

フレーム移行と「包摂性」

——教員会議における話題と参与構造からの一考察*——

内 田 ら ら

1. はじめに

本稿は、相互行為に対する期待の構造である「フレーム」の位置関係と視点に新たな知見を加えることで、制度的場面における会話展開の一貫性を説明する手がかりの提供を目的とするものである。これまで、制度的場面の研究では、話題¹⁾に応じた参与形態は明らかにされたが、その多くが移行で生じる各フレームの併置に終始していた。しかし、会議の中に色々な相互行為が含まれることをふまえると、筆者は、多様な各フレームの間に見る縦のつながりに着目することが不可欠だと考える。

そこで、本論文では、1つの日本人教員会議を対象に、話題ごとの参与構造とそこから浮き彫りになるフレームを分析し、話題同士あるいはフレーム同士の関係を見るべく、話題の変化に伴うフレーム移行の様子を示す。そして、最終的には、特に制度的場面におけるフレーム同士の関係を考察する時、1つのフレームが他のフレームを成立させるための背景知識として包み合わされる性質、即ち「包摂性」という視点が有効であると主張する。

2. 理論的枠組

2.1. 制度的場面の会話分析

制度的場面は、組織や制度といった「外形的」(好井 1999:36)な影響を持つもので、その先行研究は以下の2種類に分けられる。1つは、社会的地位²⁾による展開に焦点をあてたもので、制度的場面特有の語彙選択や話者交替などの現われ方を述べた Drew and Heritage (1992) や、制度的場面に見られる立場の非対称性と権力の関係を示した Diamond (1996) が含まれる。しかし、どちらも「制度」の特異性を明示するため、話題を問わず「制度」による拘束を如実に表す言語や行為の記述に留まっている。もう1つは、Tannen and Wallat (1993) など、話題に応じたフレーム移行に触れたものである。この研究では、小児科での診察場面において、相互行為の解釈を説明する「相互行為フレーム」(59)である「患者の診察」「保護者との相談」「結果報告」は

同列で存在するが、各フレーム間の移行は、他の参与者や出来事などに関する会話前からの知識や期待を扱う「知識スキーマ」(60)が参与者間で一致しなかった時に起こると指摘した。これは、話題や参与構造の変化に応じた会話展開の説明には有効だが、各フレームを併置してその多様性を出した段階から発展が見られず、フレームの包含性を論じるには十分ではないと言える。

2.2. 会話のフレーム分析

Goffman (1974) は、1つのフレームは、会話行為として参与者に具現化される「中核」と、どの状態で行為が顕在化するかを示す「周辺」から成り、両者は依存し合うことなく、場面的変化と共に「周辺」が「中核」に幾重にも重なっていくと述べた。そして、このフレーム内構造を複数のフレーム同士の関係に応用したのが Ribeiro (1993) である。彼女は、精神病患者の語りに現われる「問診」と「思考障害」という異なるレベルのフレームにおける移行について、後者が前者に埋め込まれると捉えることで一貫した談話展開が切り取れるとした。この「埋め込みによる一貫性」は、制度的場面での複数のフレームの間に上下の関係を見い出しており、大いに示唆に富む。しかし、埋め込みの際、「中核」と「周辺」が互いにどのように他者に寄与していたのかについては全く述べられていない。その点で、一貫性がいかに形成されていくのかを包括的に説明することはできないと言えよう。

上記の先行研究に対し、筆者は、会議の一貫性に照らした時、相互依存性を持つフレーム同士の移行で、ある下位レベルのフレームは上位レベルのフレームに背景知識や情報を与える機能を持ち、それが果たされて前者が後者に包み合わされることで上位レベルの方の特徴が前面に出されると考える。本論文では、この性質を「包含性」と名づけ、以下で提起する。

3. 研究の焦点

制度的場面の先行研究で見られた『『制度』に拘束された会話展開』と「フレーム間の『多様性』」は、いずれも「場面における一貫性」の視点に欠けていると言える。この視点は、様々な話題やフレームが1つの制度的場面で繰り返し移行することを考慮しており、制度的場面としての円滑な相互行為の仕組や所以の解明に重要である。従って、先行研究での知見から「会議としての一貫性」を加えた研究に発展させるには、各フレーム間の相互依存性を前提としている「包含性」を分析の視点に入れ、表出する参与構造とそこから浮かび上がるフレームの考察が必要になると言えよう。ここで、フレームは「談話の中の言語的形体をとって表象される」(三宅 2004:128) ので、教員会議での会話で明らかにされる参与構造の分析は、どのようなフレームが見られるかを研究する際には有効な手立てになると考えられる。

上記を念頭に、本稿では以下の視点から分析と考察を行う。

- (A) 話題ごとの参与構造、並びにそこから浮かび上がるフレームはどのようなものか。
- (B) 1つの教員会議で見られる複数の話題はどのような時に移行するのか。そして、そこで浮き彫りになるフレーム同士の関係はいかなるものか。

このうち、「話題移行とフレーム同士の関係」を提示したのは、単一の話題に見る参与構造とフレームを示すだけでは、『制度』に拘束された会話展開と「フレーム間の『多様性』」が「制度的場面」の特徴として同時に存在するという矛盾を拭いきれないと考えたからである。そこで筆者は、複数の話題なりフレームが互いに補完し合うなど、「場面における一貫性」を満たすために個々の相互行為がなされるとの立場から、以下の分析と考察を進める。

4. データ

本稿では、関東地区の某4年制大学で行われた教員会議の録音資料(約90分間)を分析対象にする。参加者はA(教授兼学科主任)、B(助教授)、C(助教授)、D(助手)という³⁾、各々の間に社会的地位の違いが存在する4名で⁴⁾、議題は「退職教員(以下e)の記念講演と懇親会の運営法」である。なお、話題に対する参加者の期待の構造を分析するため、議題を中心とした方向性の観点から、データに見られる話題を大きく「決定事項の具体化に寄与する話題」と「決定事項の周辺にあたる話題」に分類する。このうち、前者には「記念講演を遠慮するeへの対処法」や「懇親会の運営方法」など、議題の決定事項やそれに導く提案の話題が、後者には「eが記念講演を辞退する理由」や「退職記念講演に関する前例」など、議題の一部を情報として参加者間で分け合う形の話題が含まれる。

5. 分析

5.1. 話題ごとの参与構造とフレーム

はじめに、「決定事項の具体化に寄与する話題」と「決定事項の周辺にあたる話題」の各々で参加者はどのように会話を進めているのか、その参与構造を分析する。そして、そこから浮き彫りになるフレームを、教員会議を含めた制度的場面に特有の「自分が特定の場面で果たすべき役割への意識」(以下「役割意識」)の有無に関係づけて提示する。ここで「役割意識」を用いるのは、制度的場面の先行研究で「制度性」が強調されたことをふまえると、相互行為での期待の構造として「役割意識」が想定されていたことがうかがえるからである。

5.1.1. 決定事項の具体化に寄与する話題

eの記念講演と懇親会の運営法に直接関わる話題では、参加者の持つ情報量を問わず、社

会的地位が最も高いA⁹⁾に直接的あるいは間接的に意見を求める形で発せられ、それに対するAの意見が議事を結論に導く。そして、そこから浮き彫りになるのは、社会的地位に基づいた「役割」に従い、決定権を持つ人に意見を集約させ、その人物が議事決定の方向づけをする「相談と決議」のフレームである。以下、(1)では1人の参与者による話題提示について、(2)では複数の参与者による話題提示について、参与構造とフレームを示す。

はじめに、(1)で、Cが提示した話題への他の参与者の関わり方と議題進行の様子を示す。

(1)¹⁰⁾ 記念講演を遠慮するeへの対処法

【eが助手Dに記念講演を遠慮したいと伝えたことを、CはDから聞いて知っている。】

- 01 C：なんか、さっきちょっと、話を、ねえ、私、あのちょっと聞いたら、なんか汚す、汚すだとかね、
- 02 A：うん？
- 03 C：××、××研究会//を、自分が、その、訳の分からない話をすることによって
- 04 B： //あっ、汚すね。@@
- 05 C：(0.8)あの、これまでの伝統を汚すことになっちゃいけないだとかね、そういうことをおっしゃってたんで、それは(0.8)あの、謙遜でしょ？謙遜っていうか、要するに遠慮でしょ？
- 06 A：うーん。
- 07 C：だから、だとすれば「やって下さい」というふうをお願いするのがね//なんか
- 08 A： //うーん。
- 09 C：いいのかなあと思ったり//もするし、だから。
- 10 A： //うん。 うん。
- 11 (1.4)
- 12 A：うん、だから、本気でそういうふう¹¹⁾に思ってたらしやるんだったら、まあ、説得しなくていいか、//その部分はね。
- 13 C： //うん。 そうそう。それでなんかg先生のことね。
- 14 A：うん。
- 15 C：あのう、g先生結局×××の話、あそこでなさいましたよねえ。
- 16 A：うんうん。
- 17 C：それで彼女がおっしゃるには、あの、g先生には悪いんだけど、あのう、×××をお辞めになってね、あの、彼は、まあ、反省って言わなかったな、なんかあんまり良くなかったのかもしれないみたいだね、そんなことを言っていましたよね。

(1)では、Cが、01から09で、Dから聞いた「記念講演を遠慮するeの話」の内容と

それに関する自分の意見を述べている。ここでC (09) は、「だから」という、後に帰結部を従える表現で発話を中断し、他の参与者に間接的な形で意見を求めている。これに対しては1.4秒のポーズを経てA (12) が、eが謙遜で記念講演を遠慮しているなら説得するべきだと意見を出している。そして、記念講演を遠慮するeの意向を直接聞いたDの発言でも2人の立ち話を耳にしたCの発言でもなく、A (12) が当該の話題の結論になっている。これは、C (13) 以降、過去に退職したgの記念講演に関する話題に移っていることから分かる。

次に、下の会話例で、BとCが共同で提示した話題がどう展開されるのかを分析する。

(2) eへの記念講演の依頼方法

- 01 C：うん、いや、だからお願いする時も、こちらが絶対やっていただくつもりで
 02 B：うん。
 03 C：お願いするのとね、//違うじゃない。
 04 B： //だから、お身体がもし無理じゃ//なければ是非お願いしたい
 05 C： //うんうん。
 06 B：ということで//いいんじゃないですか？
 07 C： //うん。
 → 08 A：それでいいと思いますよ。=
 → 09 B：= ね、お身体が//無理だったらばも//う無理にはできな//いけど。
 10 C： //うん。 //うんうん。 //うん。
 → 11 A：本当にね、それが健康上の無理なのかどうかさ。
 12 C：うん、そうですね。わりとすぐ謙遜なさる方でしょ、彼女。違う？
 13 B：いいえ、そうだと思いますよ。
 → 14 C：ね？だから本意が本当に
 15 B：うん。
 → 16 A：うん。
 17 (1.0)
 18 B：でもなん、それ今回のきっかけは何かDさんの方から確認したの？

(2) で、B (01) からC (07) は、体調を理由に記念講演を遠慮するeへの依頼方法について、BとCが内容を共同構築しつつ提示している。ここで、B (06) が他の参与者に直接的に問いかけるのに対しては、A (08) が2人の意見を締め括る表現で答えている。その後、B (09) が前言の内容を繰り返して、言いさして間接的に他の参与者に確認するが、それに対する答えはA (11) である。彼は「本当にね」とBの意見を尊重する表現を添え、A (08) を支持する形で今までの内容をまとめている。さらに、A (11) を支持したC (12, 14)

も「本当に」で中断された確認だが、それに続くA(16)の「うん」という承認と1.0秒のポーズが、C(01)からの話題の終着点になっている。そして、この時点でA(08)が決定事項として確定したと言える。その証拠に、B(18)以降の話題は「eの遠慮理由をなぜDが知っていたか」に変わっている。

ここで、(1)でも(2)でも、B, C, Dが、社会的地位が最上位のAに状況を説明しつつ「相談」の形で話を向け、それに対しAが意見を述べないと物事の決定がなされないという相互行為が展開されていた。この時、各参加者は、会話前から存在する「A = 議事の最終決定権を持つ人、B, C, D = Aに意見を求める人」という、社会的地位に沿った「役割意識」に大きく規定されている⁷⁾。そこから、上記の例における参与構造で浮き彫りにされたのは、役割意識の下、相談により議事を集中させAが決定へと方向づける「相談と決議」のフレームであり、それが「決定事項の具体化に寄与する話題」で議事決定を円滑に行うために期待されているものだと言えることができる。

5.1.2. 決定事項の周辺にあたる話題

一方、議題からすれば周辺部分にあたる話題は、社会的地位を問わず、その話題への知識や情報量が多い参加者が主導的に話を進め、他の参加者の協力を得て展開する。そしてそこからは、前項の「役割意識」が取り払われ、情報を最も多く持つ人を中心に参加者間で理解一致を目指す「情報収集」のフレームが浮き彫りになる。以下、(3)ではDが中心の話題展開について、(4)ではAによる話題展開協力について、参与構造とフレームを説明する。

はじめに、社会的地位が最も低いDが、情報量が多いために中心的に話題を展開させていることを(3)で示す。

(3) eが記念講演を辞退する理由

01 B: でもなん、それ今回のきっかけは何かDさんの方から確認したの?

02 D: いいえ突然

03 B: e先生の方から =

04 D: = Dさんと言われて =

05 B: = あ申し出があった。

06 D: はい

07 B: だけどDさんに来るのも

08 (0.5)

09 D: あそれはねその//あれなんです。明日合同会議があるということを

10 B: //おかしいですね。 ええ

11 D: あの読まれて

- 12 B : ええ
13 D : Dさんって言って、先に言っとくけれどということで、
14 B : あ
15 D : 明日先生方の前でもう一度おっしゃる。
16 B : ああじゃ//先生の方からお話が
17 C : //ああじゃその時に =
→ 18 A : = その前って合同会議で?
19 D : いや、合同会議じゃないと思いますけど。

ここで、B (01) は、e が記念講演を辞退する話をなぜ D が知っていたか質問している。それに対し D は、B による頻繁な確認表現やあいづちなどに導かれつつ、実際に e と話をした人物として中心になって当時の事情を説明している。このやりとりが暫く続いた後、A (18) の「その前って合同会議で」が出てくる。しかし、これは情報を求める言い方で、決して議事決定に導くものではない。その証拠に、A (18) は、続く D (19) に打ち消されている。

次に、(4) で、社会的地位が最も高い A が話題展開協力者として参与している例をあげる。

(4) 退職記念講演に関する前例

- 01 B : 日本文学はあの f 先生が固辞したんでしょ。(1.0)
02 C : ああ//そうでしたね。
→ 03 A : //で結局、先生、出席しなかったんですかね。
→ 04 B : しなかったんです。それでちょうど同じ時期に g さんがやめたんだけ//ど、
05 C : //ん
06 B : g さんはああいう形でね (1.0) 記念講演、という//よりも何かちょっとね、違う
07 C : //ん //あつ、うーん。 ん
08 B : (1.0) 形でやったんですね。あれも××××研究会なんですか?
09 C : んそうです//×、×、××××研究会でおやりになりましたよね。
10 B : //あそうですか、じゃあそこでやったんですね。
11 A : うーん。
12 C : f 先生初めてなんですか? それまでは日本文学でも全部あのやりました?
→ 13 A : やりましたね。
14 C : じゃ f 先生が特別//に
15 B : //うん、初めて、のような =
→ 16 A : = ま、ま、//あの、僕が来てから、

- 17 B : //ええ。//ああ。
 18 C : //はあはあはあ。
 → 19 A : 少なくともね。それ以前のことは知らないん//ですけど。
 20 B : //ああ
 → 21 C : うーん、ん彼は何で何か何か//理由おっしゃってましたか？
 22 B : //いや、もう、言わないですね。
 23 C : ああとに//かく、やんない。
 24 B : //とにかく私はそういうことは遠慮させていただきます、それだけです。

(4) では、B (01) で過去に記念講演を固辞した教員の話題が提示されたのに対し、A (03) はC (02) と重複して発言する。しかし、それはAがB (01) やC (02) に関する情報を求めるためだと言える。事実、A (03) には当該の話題を出したB (04) が答え、同じ時期に退職して記念講演とは違う形をとった別の教員の話題につなげている。

一方、記念講演の慣例に関するC (12) の質問にはA (13) 「やりましたね」が続く。しかし、これは議事決定とは扱われず、Aが他の参与者よりも長く大学にいるために、情報を提供する話題展開協力者の立場で発言したものと考えられる。それは、前言を受けたC (14) の確認に対するA (16, 19) が、あくまで自分が知っている事柄だけを伝える表現であることからうかがえる。しかも、C (21) 以降、話題提示者で情報を最も多く持つBを中心に、B (01) からの話題が維持されているので、A (16, 19) も議事決定に導いていないとわかる。

ここで、会議でのAの立場を考えると、A (13) は「うちの学科でもやるべきだ」と推論でき、記念講演に関する結論となり得るが、それを避けるためにA (16, 19) で情報提供の発話に戻したとも分析できそうだが。しかしその時、「物事の最終決定権を持つ」Aが、上記の例に限り「結論」とみなされるのを避けた必然性が見い出せない。加えて、会話を詳しく分析すると、Aを中心に展開される13から20は、C (12) に「当時の状況に詳しい参与者」として答えたもので、その証拠に、C (21) は「うーん」という内容理解の発話で受けている。さらにA (16, 19) は、B (15) の「初めて」の内容を補足しており、Aはここで「情報収集」に戻したというより、もともとBが中心の話題に貢献する目的で参与したと言える。従って、A (13) 自体、話題展開に協力する発話に過ぎず、一時的であれ「結論」は出されていないと考える。

以上、(3) と(4) では、当該の話題に最も詳しい参与者を中心に、Aを含め他の参与者がその展開に協力する相互行為が見られた。この時、会話前から参与者間に存在する「役割意識」の規定を受けず、情報量の多い人が他の参与者に話題を提供し、皆がそれを共有して理解一致を旨とする「情報収集」のフレームが、議事決定に導く周辺情報の円滑なやりとりで期待されていると言える。そして、逆に、社会的地位が一番高い人を軸にこの類の話題が展開する時、情報量が少ないと円滑な会話に支障が出ると予想されるが、それを最小限にする

ことが求められるので、ここでは「情報収集」のフレームが浮き彫りにされたと考えられる。

5.2. 話題移行とフレーム移行

前項では、会話例を通じ、1つの教員会議に存在する「決定事項の具体化に寄与する話題」と「決定事項の周辺にあたる話題」における参与構造とフレームを示してきた。本項では、参与構造を手がかりに、2つの話題から浮き彫りにされるフレームが移行する状況を分析する。この観点、教員会議という1つの場面で、ともすれば互いに相反するような参与構造を持つ2つの話題が存在する理由と両者の関係を考察する上で有効なものである。

5.2.1. 「具体化」から「周辺」への移行

最初に、(5)で「決定事項の具体化に寄与する話題」から「決定事項の周辺にあたる話題」への移行を示す。そしてこれは、決定事項の具体化を続ける上で必要な情報を集める時に起こり、その際、決定権を持つAに意見や情報を集約させる「相談と決議」のフレームから、参与者間で情報への理解一致を旨とする「情報収集」のフレームに移行していることを述べる。

(5) 懇親会の運営方法 → 過去の懇親会の慣例

01 C : で、いずれにしる懇親会はe先生大丈夫ってふうにおっしゃってる//わけだから	
02 D :	//はい。
03 C : どういう希望ですかと言うことですね。	
04 D : そうですね。	
05 A : うーん。	
06 C : うんうん。	
07 (1.2)	
08 B : それ、送別会になるんですか? いや、両方は兼ねないですよ。	
09 C : でも、送る会は別にやるんですしたっけ? =	
10 B : = あれどうでしたっけ?	
11 A : いや、それはね =	
12 C : = うん。	
13 A : あのー、我々がやりますよ?	
14 B : やりました? 送別会。	
15 A : うん。小さいけどね。	決定事項の具体化に寄与する話題
→ 16 B : gさんの時もやりました?	
17 A : え?	
18 (1.4)	

19 D : g 先生の時 h 先生 ⁹¹ と	
20 A : 一緒。＝	
21 C : ＝ ああ一緒だった。	
22 B : 一緒だった？	
23 D : ××会館で	
24 B : あ、そうなんですか？	決定事項の周辺にあたる話題

この例で、C (01) から A (15) は、A が懇親会と送別会の運営に関する決定事項に導く話題だが、B (16) で、「g さん」という、議題に直接関係する e とは違う人物名を出し、退職時の慣例を尋ねる「決定事項の周辺にあたる話題」に移行している。ここで、B は突発的に g の話を始めたのではなく、送別会の背景事情に詳しくないので、前例を頼りに議題の情報を収集するために始めたと考えられる。事実、B (24) 以降、暫く 4 人で前例の話をした後、退職教員が 1 名の今回は懇親会のみ行うと決定した。

この時、C (01) から A (15) では、B, C, D が A に意見を集約させ、それを受けて A が議事決定に関する方向づけをしており、そこには「相談と決議」のフレームが存在している。一方で、B (16) 以降は、直前の話題で背景知識を共有していなかった B に対し、社会的地位を問わず、知っている情報を直接提供し、B も情報を確実にするべく質問や確認を継続させている。ゆえに、そこで、情報を得る際に期待される「情報収集」のフレームに移行している。

従って、決定事項を具体化する話題での「相談と決議」のフレームから周辺の話題での「情報収集」のフレームへの移行は、前者の継続に必要な情報を集める場合に見られると言える。

5.2.2. 「周辺」から「具体化」への移行

続いて、(5) と逆方向の移行、即ち「決定事項の周辺にあたる話題」から「決定事項の具体化に寄与する話題」への移行を (6) に示す。そしてこれは、情報交換で背景知識がまとまって議事決定に戻る際に生じ、そこには、理解一致の「情報収集」のフレームから、決定権を持つ A に意見を集約させる「相談と決議」のフレームへの移行があることを述べる。

(6) e が記念講演を辞退する理由 → e への記念講演の依頼方法

01 B : おかしいですね。それ、どうしてだろう？ それ、あの、主な理由は体調？ (1.0)	
02 D : 主な理由はそう。	
03 B : 体調のことはあんまりおっしゃらなかったんですか？ 汚//すって、汚すっていう。	
04 C :	//私は全然体調は聞いて
ないの。	
05 D : 体調の話は最初におっしゃったんですけど、でもそれよりもって、//おっ	

06 B :	//それよりも。
07 D : しゃって	
08 B : あ、じゃー、一旦は引き受けただけども、色々考えてみるってこと//でしょう	
09 D :	//はい。
10 B : かねえ。	
11 D : (0.6) でも一、心配なさって、皆さんに心配かけるからかもしれませんね。 体調って言っちゃうと (@)	
12 B : //あー。	
13 C : //あー。	
14 D : 皆さんが心配なさるからかなーて私は聞いてたん//ですけれども。	
15 C :	//あー、あ、じゃ遠慮ではなくって、 やっぱり体調かもしれない。
16 D : そう、そう。	
17 C : ふーん。	決定事項の周辺にあたる話題
→ 18 A : その点は一応あれですね、みんな、ま、とりあえず、その主任っていう形で ね//最終的に?もう一、近づいてるから。	
19 C : //うん、うん、	うん、そうですね。うん。(2.2)
20 A : ね、//あの一	
21 C : //うーん。	
22 A : まあ、お話を聞いて	
23 C : うん。(1.2)	
24 A : 納得してもらう形で決めるしかないですよ。	決定事項の具体化に寄与する話題

この会話例は、B (01) から C (17) の、e の記念講演の辞退理由の情報が収集される「決定事項の周辺にあたる話題」から、A (18) 以降、記念講演の依頼方法を結論に導く「決定事項の具体化に寄与する話題」に移行していることを示すものである。具体的には、2週間前まで記念講演に前向きだった e が突然辞退を申し出た理由について、B, C, D が「体調」や「自分の講演で学科の名を汚すという謙遜」などを出す、辞退理由が「体調」で概ね一致した C (17) の後、A (18) からは「記念講演の受諾は、A が主任として e に話を聞き納得の行く形で決める」という、記念講演の依頼方法に戻って議事が進められた。ここで A は、内容をまとめて次の状態に移る意味の副詞「ま (まあ)」を用いてフレームを移行させている。

この時、C (17) までは、B, C, D が互いに情報を出し合って1つの内容を共同構築しており、そこでは情報共有と理解一致のために期待される「情報収集」のフレームが浮かび上がる。一方で、A (18) より後は、A が、事柄の最終決定権を持つ立場を顕示する「主任」と

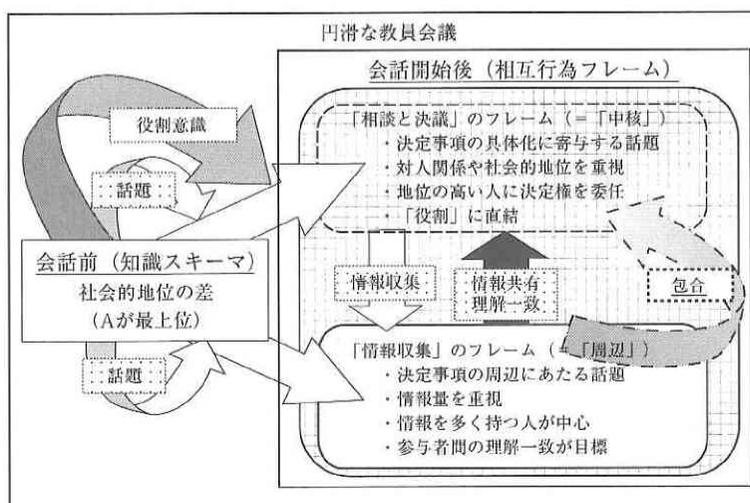
いう言葉で自らを位置づけたのに加え、他の参加者がAに意見を集約させて方向づけを求め、Aもそれに答えて決議を導く構造に変化している。そこで、議事決定を円滑に行う時に期待される「相談と決議」のフレームが浮き彫りにされる。

ゆえに、決定事項の周辺にあたる話題での「情報収集」のフレームから決定事項を具体化する話題での「相談と決議」のフレームへの移行は、情報交換で背景知識がまとまり、教員会議の主要目的である「議事決定」に戻る際に生じると考えられる。

5.3. フレームの包含性

前項でのフレーム移行の議論をふまえ、本項では、「相談と決議」のフレームと「情報収集」のフレームとの関係について考察する。はじめに、教員会議全体に対する2つのフレームの位置を概説する。この場面では、会話の前から参加者間に「社会的地位の差」に基づくふるまいが「知識スキーマ」(Tannen and Wallat 1993:60)として存在している。そして、会話が始めると、そのスキーマでの知識は「相互行為フレーム」(59)に現われるが、そのフレームは話題に応じて「相談と決議」のフレームと「情報収集」のフレームに分類される。

そこで、本論文の教員会議に出る「相談と決議」のフレームと「情報収集」のフレームという、Ribeiro (1993)の論考に従えば、各々「中核」と「周辺」にあたるものとの間には、「包含」と「被包含」の関係があると言える。換言すれば、「情報収集」のフレームは「相談と決議」のフレームに対する「前座」として包み合わされており、そのうち「相談と決議」のフレームが前面に出されることによって、「制度的場面としての一貫性」が生まれる関係にあると考えられよう。以上の点、並びに前項までの論考を下の図にまとめる。



図：教員会議に現れるフレームの移行と包含性

ここで提起する「包含性」は、Ribeiro (1993) の言う「周辺」が「中核」に「埋め込まれる」関係とは若干異なる⁹⁾。なぜなら、彼女は「周辺」が「中核」の背景を作ると指摘しても、後者から前者への移行には殆ど着目せず、両方向の移行がいつ起こるかを全く述べていないからである¹⁰⁾。他方で、上の図は、各々のフレーム移行が起こる場合とその詳細に触れており、Ribeiro (1993) が静的な位置関係のみを捉えたのに対し、「包含性」は「中核」と「周辺」において、一方が他方に行く貢献という動的側面を明らかにしてくれるので、双方のフレームや、それが具現化された相互行為が「一貫性」の下に存在する所以を説明できる。

では、「相談と決議」のフレームが前面に出される時、それは「情報収集」のフレームに「優先」すると言ってよいだろうか。確かに、「優先」の場合も、「制度的場面」の相互行為が前面に出され、他の性質を持つ参与構造があっても、それが場面全体を特徴づけはせず、その点で前者は後者に「優先」していると言えよう。しかし、フレーム同士の関係で、「優先」はあくまで静的な位置関係を表す言葉に過ぎず、ここでも「移行」の動的性質は説明できない。なぜなら、「情報収集」のフレームは、「優先」で想定されるように「相談と決議」のフレームに対して単に従的に存在しているのではなく、より上位にある「相談と決議」のフレームを成立させるべく原因や理由などで動的に貢献しているからである。そして、その内容が然るべき理由づけで形が整った後、「相談と決議」のフレームに移行して包み合わされる。その時点で、この教員会議は「制度的場面」に分類され、「制度性」が前面に出されるのだ。以上の事柄を余す所なく説明できる言葉、それが「包含」であると筆者は考える。

6. おわりに

本論文では、社会的地位が異なる4名の教員会議における「決定事項の具体化に寄与する話題」と「決定事項の周辺にあたる話題」での参与構造とそこで浮き彫りにされるフレームを明らかにした。さらに、両方の話題あるいはフレーム同士の関係を「移行」の観点から考察し、「相談と決議」のフレームは「情報収集」のフレームを「包含」すると指摘した。

以上の知見は、相互行為分析におけるフレームの有効性を支持するものである。それに加え、頻繁な話題変化とフレーム移行が、いずれも「議事決定」という主要目的の達成に方向づけられていることをふまえると、多様性など横のつながりで二次元的に捉えられてきたフレームに、「包含」と「被包含」という「三次元性」を提起することになり、今後の相互行為の会話分析に一石を投じた研究と位置づけられよう。しかし、一方で、本稿は1つの教員会議を分析してフレームの捉え方に新たな視点を提起したが、今後は、データの質と量を充実させ、制度的場面と「包含性」の関係をより精緻に分析し考察することを課題にしたい。

注

*本稿は、日本語用論学会第6回大会での口頭発表に加筆修正したものである。大会発表やその後の論文執筆に貴重なご意見やご指導を頂いた方々に、心からお礼を申し上げたい。

- 1) 参与者同士のやりとりで言及対象となるある特定の事柄 (cf. 村上・熊取谷 1995:101)。
- 2) 本稿では、「教授」「助教授」「助手」という職業に伴う順位づけを指す。
- 3) 各参与者の役職は、データ録音当時のものである。
- 4) BとCは同じ役職だが、年長で勤続年数が長いBを上での地位にいる参与者と扱う。
- 5) Aの参与構造は、社会的地位でなく「議長」の特質に起因するにも思われる。しかし、実際に議長は指定されておらず、皆がAを「決定権を持つ人」と捉えて会議を進めたのは、Watanabe (1993) が日本人の討論進行の特徴にあげた、社会的地位に負う所が大きいだろう。
- 6) 本稿の会話例で用いた記号は、以下の通りである。

//: 重複発話の開始箇所	=: 切れ目ない発話
(数字): 沈黙の秒数 (0.5秒以上)	、: 0.5秒未満の沈黙
? : 上昇イントネーション	。: 下降イントネーション
××: 固有名詞の省略	@: 笑い
→: 分析で注目する行	—: 分析で注目する表現

- 7) 現に、Aの途中退席後、議事決定の周辺の話題が殆どで決定事項は1つに留まった。これは、最終決定権を持つAの不在で議事が決定に至らなくなったことによると言える。
- 8) hは、fやgと同様に、eより前に退職した教員である。
- 9) Ribeiro (1993) は、「周辺」が「中核」の背景を流れ、要所で後者が出没する「共存」の例に思われる。確かに「共存」にも相互依存性や動的側面はないが、「埋め込み」と違い「共存」は「中核」に動的な性質が見い出せるので、彼女の例は「共存」とは異なると言える。
- 10) フレームの「共存」関係は、本稿の例(4)でも見られるとのご指摘を頂いたが、5.1.2.で示した参与構造や会話展開を見る限り、(4)は、一時的であれフレームが「共存」するとは分析できない。しかし、「共存」自体は大変興味深く、多くの例で検証する必要性を筆者も強く感じている。ただ、今回は紙面の都合もあるので、具体的な考察は別稿に譲りたい。

参考文献

- Diamond, J. 1996. *Status and Power in Verbal Interaction*. Amsterdam: John Benjamins.
- Drew, P. and J. Heritage. 1992. "Analyzing Talk at Work: An Introduction." In P. Drew and J. Heritage eds. *Talk at Work*, 3-65. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, E. 1974. *Frame Analysis*. Mass: Northeastern University Press.
- 三宅和子. 2004. 「COLUMN フレーム」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰 編『メディアとことば』1 (特集)「マス」メディアのディスコース) 128-129. 東京: ひつじ書房.
- 村上恵・熊取谷哲夫. 1995. 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, 101-111.
- Ribeiro, B. T. 1993. "Framing in Psychotic Discourse." In D. Tannen ed. *Framing in Discourse*, 77-113. New York: Oxford University Press.
- Tannen, D. and C. Wallat. 1993. "Interactive Frames and Knowledge Schemas in Interaction: Examples from a Medical Examination/Interview." In D. Tannen ed. *Framing in Discourse*, 57-76. New York: Oxford University Press.
- 好井裕明. 1999. 「制度的状況の会話分析」好井裕明・山田富秋・西阪仰 編『会話分析への招待』36-70.

京都：世界思想社.

Watanabe, S. 1993. "Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions."
In D. Tannen ed. *Framing in Discourse*, 176-209. New York: Oxford University Press.